

ロシア昔話「おおきなかぶ」の受容研究
—『おおきなかぶ』(福音館書店、1962)以前を中心に—

A Study of the Acceptance of the Russian Folk Tale “Gigantic Turnip”
: Focusing on the Ages before *The Turnip – An Old Russian Tale*
Published by Fukuinkan Shoten Publishers in 1962

丸尾 美保

MARUO Miho

要旨

ロシア昔話「おおきなかぶ Репка」は、大正期に児童雑誌で日本に紹介された。最初の紹介である絵物語「[オヂイサンガ カブラヲ ウエマシタラ…]」（『幼年の友』、1918.1）は、E.ビョームのシルエット画（1881,1886）「おじいさんとかぶの話」を日本化したものであった。読み物としては、「蕪（かぶら）」（『少年』、1922.10）が最初である。1924年に、アフナーシエフ『ロシア昔話集』所収の「蕪菁（かぶら）」が中村白葉訳で出版され（アフナーシエフ型）、翌年、ロシアの教科書掲載の「かぶら」（ウシンスキー型）が『ロシア小學讀本 第一学年』（吉田薫訳、1925）で紹介された。以後の受容は、このふたつの翻訳が基になっていると推測する。昭和戦前期になると、「おおきなかぶ」は脚色されて児童劇の定番となっていく（栗原登「大きなかぶ」、1935など）。戦後はロシア昔話として定着する一方、劇としてのバリエーションも増えた。また、2社の小学校1年生の国語教科書にも「大きなかぶ」が掲載されたが、短縮されたり、改変されたりしたものであった。

Abstract

The Russian folktale “The Gigantic Turnip” was introduced to Japan through children’s magazines in the Taisho Era. The first publication was a picture story “A grandfather plants a turnip ...” (*Younen-no-Tomo*, January 1918), which featured Japanese-style pictures of silhouette lithographs of “The Story of Grandfather and a Turnip” by E. Bohm. The first publication of a story was “The Turnip” (*Shounen*, October 1922). In 1924, “The Turnip” in *The Russian Fairy Tales*, written by A. Afanasyev, was translated by Hakuyou Nakamura and, the next year the translation of the Ushinsky-type in Russian school textbooks was published (tr. by Kaoru Yoshida, 1925). These two translations were the basis of the later Gigantic Turnip stories in Japan. During the Showa Age before World War II “The Gigantic Turnip” was dramatized and became a standard feature of children’s theater (Noboru Kurihara “The Gigantic Turnip,” 1935 ex.). After World War II “The Gigantic Turnip” was established as a Russian tale with many variations. It appeared in two school textbooks for the first class in the primary school, but the stories were shortened and much changed.

Key Words

おおきなかぶ、アフナーシエフ、ウシンスキー、絵本、児童劇

Gigantic Turnip, Alexander Afanasyev, Konstantin Ushinsky, Picture Books, Children’s theater

1. はじめに

ロシア昔話「おおきなかぶ Репка」は、大きく育ったかぶをおじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが列になって引っ張って抜くという累積昔話で、ロシアだけでなく、日本を含めて世界で知られている。

昔話のタイプインデックスによると、「おおきなかぶ」は累積昔話 (Formula Tales) の ATU2044 (Pulling Up the Turnip) に分類されている。内容は以下のとおりである。ロシア以外に、フィンランドやラトビアなどの国でも伝承されている。

男がかぶを引き抜こうと試みる。一人では果たせず、妻を呼ぶ。妻は男を引っ張り、男はかぶを引っ張る。しかしかぶは地面から抜けない。もっと多くの人と動物が援助に呼ばれる。最後に援助者の長い列がかぶを引っ張り、かぶは抜ける。(拙訳)

(Hans-Jörg Uther. *The Types of International Folktales : a Classification and Bibliography : Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson, Part2*. Helsinki : Suomalainen Tiedeakatemia, 2004, p.531)

日本で「おおきなかぶ」を論じるに際して、1962年5月に『こどものとも』として福音館書店から発行された『おおきなかぶ』(A.トルストイ再話、内田莉沙子訳、佐藤忠良画)を落とすことはできない。この絵本『おおきなかぶ』は、2018年2月に177刷を数えるロングセラー絵本となっている。また、今日では多数の画家による様々な「おおきなかぶ」絵本が出版されており、小学校1年生の国語の教科書にも、内田莉沙子や西郷竹彦訳の「おおきなかぶ」が掲載されている¹⁾。

では、ロシア昔話「おおきなかぶ」は、いつ日本にどのような形で入ってきて、今日の姿になったのであろうか。2018年現在まで、「おおきなかぶ」の日本での受容について調査を続けているが、本論文では、最初の受容から1962年発行の福音館書店『おおきなかぶ』以前の受容について検証する。現在判明している全資料を表1にまとめ、分析した各作品には表の対応番号を明記した。

受容研究には原典となった作品の調査が不可欠であるため、今回検証した「おおきなかぶ」の原典と推測される資料について、2. 日本で受容された「おおきなかぶ」で提示する。その後、3. 大正期、4. 昭和戦前期、5. 戦後1962年までの各作品について分析し、最後に考察を行った。

2. 日本で受容された「おおきなかぶ」の原典

これまでに調査した日本で発行された「おおきなかぶ」の再話について、ロシア語や英語、ドイツ語などの原典を検討した結果、現在のところ以下の4作品が日本で紹介されたものの原典として受容されたと推測する。日本での受容の原典を考察する際に、鍵となる要素に下線を引いた。

①1863年 A.アファナーシエフ「かぶ」Репка (『ロシア民話集』掲載)

アレクサンドル・アファナーシエフ Александр Николаевич Афанасьев (1826-71) の『ロシア民話集』«Народные русские сказки» (初版 1855~63) の89番にアルハンゲリスク県で採集した「かぶ」の話が掲載されている。挿絵はない。概要は以下の通りである。

表1 「おおきなかぶ」受容の歴史 (1962年まで)

出版年月日	タイトル	文作者・訳者	挿絵	所載雑誌・本	出版者	原典推測など	分類	
大正期								
1	1918.01.02	[オチイサンガ カブラウ エマシダラ..]	記載なし	シルエット画	『幼年の友』10巻2号	実業之日本社	ピョームの絵に似ている	雑誌記事
2	1922.10.08	「蕪(かぶら)」	富士辰馬譯	1図あり	『少年』231号	時事新報社	ウシンスキー型	雑誌記事
3	1924.10.30	「蕪青」	中村白葉訳	なし	『アフナーシエフ童話集』『世界童話大系』五巻 露西亞篇(一)	世界童話大系刊行会	アフナーシエフ『ロシア民話集』の「かぶ」	昔話集
4	1925.04.20	「かぶら」	吉田薫訳(ロシア工学士)	文の上部に6図(7コマ)のモノクロ線画の挿絵	『ロシア小學讀本 第一学年』	世界文庫刊行會	ウシンスキー型	教科書読本
5	1925.06.01	「蕪ぬき」	文字なし	上部3分の1にシルエット	『金の星』7巻6号	金の星社	ピョームの絵に似ている	雑誌記事
6	1925.08.01	「蕪青」	記載なし	なし	『鑑賞文選 尋常四年』八月号	文園社	アフナーシエフ/中村白葉訳をほぼそのまま転載	雑誌記事
昭和戦前								
7	1927.01.01	「蕪青(かぶら)」	記載なし	1図。着物姿、擬人化された足が5人/立野道正の絵と推定	『カンショウブンセン 尋常二年』(13号)一月号	文園社	6の改訂版(白葉に戻す)	雑誌記事
8	1927.04.20	「一八 カブラーロシヤ」	吉田薫訳(ロシア工学士)	文の上部に6図(7コマ)のモノクロ線画の挿絵	『選集世界小學讀本 第一学年 上』	世界文庫刊行會	4をカタカナ表記にしたもの	教科書読本
9	1927.05.30	「お爺さんと蕪青」	村上寛	挿絵なし	『新しいお話の仕方と其実例』	平凡社	中村白葉訳アフナーシエフを再創造	お話の範例
10	1927.07.01	「かぶらのたね」	記載なし	4コマの挿絵/和服姿	『カンショウブンセン 尋常二年』七月号	文園社	ウシンスキー型	雑誌記事
11	1934.09.05	「お爺さんと蕪青」	村上寛	挿絵なし	『家庭並低学年童話範例』	文化書房	9に同じ	お話の範例
12	1934.12.25	「大きなかぶ 一幕」	關猛	挿絵なし(舞台の絵)	斎田喬著『学校劇選集(低学年用)』	北海出版社	ウシンスキー型。独自の脚本化。	児童劇
13	1935.10.19/20	「かぶぬき」(影絵)	高山貞章/作・演出	(人形製作・川尻泰司)	情報:川尻泰治編著『現代人形劇創造の半世紀』(未来社)	「お人形座」の公演上演目	内容は不明。ファイバーによる影絵人形劇。	影絵劇
14	1935.12.18	「大きなかぶ」	栗原登/脚色	挿絵なし(無国籍)	日本児童劇協会編『日本児童劇集 第一集』	厚生閣	ウシンスキー型。独自の脚本化。	児童劇
15	1936.03.05	「無聲劇(朗読劇) かぶら抜き」	大塚美鳥/作	舞台の大道具「かぶら」の図解	赤枝一葉/編著『学校劇脚本集 中学年用』	盛光社	ウシンスキー型。独自の脚本化。	児童劇
16	1938.11.13	「大きなかぶ 一幕」	關猛	なし	斎田喬著『児童劇選集 低学年用』	啓文社	12に同じ	児童劇
昭和戦後								
17	1945.09.15	『大きな大根』	齋田喬/脚本	伊藤文乙/美術		興亞画劇	大根を抜く独自の脚色	紙芝居
18	1946.04.20	『ミンナノチカラ』	春本寿子/文	大石哲路/畫。当時のロシア風俗。		二葉書店	アフナーシエフを短縮	絵本
19	1947.08.30	『農地改革/人形劇「大きな大根」』	齋田喬/原作、山口晋平/脚色		農地改革パンフレット(2)	農地改革協議會	齋田の脚本を脚色	人形劇
20	1948.10.20	「人形劇(青年用、児童用)大きな大根 一幕」	齋田喬/作	人形たちの絵が並んで引張っている絵	岡田陽編『玉川学校劇集 1』	玉川大学出版部	狸が登場。齋田独自の脚色	人形劇
21	1948.10.20	「小学校、低学年用 大きなかぶ 一幕」	栗原登/作者	s.u.署名の舞台の図(内野清一/舞台画)	岡田陽編『玉川学校劇集 5』	玉川大学出版部	1935年版14の改作	児童劇
22	1949.03.30	「力をあわせて」	白濱研一郎/作	濱村純/装幀・装畫	白濱研一郎/著『人形劇場』	郷土書房	独自の脚色による脚本	人形劇
23	1950.01.15	「人形劇 大きな大根」	齋田喬/著	黒崎義介/装幀	『学校劇脚本集』第一集	あかね文庫	20をバージョンアップ	人形劇
24	1950.06.25	「大きなだいこん」	上沢謙二/著	齋藤博之/繪	『ぐるぐるばなし』子ども絵文庫 11	羽田書店	独自の脚色	読み物
25	1950.07.22	「綱引き大根」	内山憲尚/著		『劇遊びとその指導』	日本保育教材	独自の脚色による脚本	児童劇
26	1950.09.15	「カブぬき」	福光えみ子	池上和子/挿絵	民主保育連盟・児童文学者協会共編『子供に読んで聞かせるお話の本 秋の巻』	羽田書店	ウシンスキー型を短縮	読み物
27	1950.09.30	「おきなかぶら」	記載なし	武井武雄/繪	児童文学者協会編『世界文學讀本 小学一年生』	河出書房	「(ロシア)アフナーシエフ」と記載だがウシンスキー型	読み物
28	1954.01.20	『大きな大きなかぶら』	ロシアの民話から	森やすじ/画	幼児教育紙芝居文庫 7	東京画劇社	独自の脚色	紙芝居
29	1954.03.10	「大きなかぶ」	上沢謙二/著	齋藤博之/繪	『ぐるぐるばなし:世界昔話』世界名作童話全集 45	大日本雄弁会講談社	24をかぶらに変更した改訂版	読み物
30	1954.09.10	「おおきなだいこん」	上沢謙二/文	河目梯二/繪	講談社の絵本『なかよし話』	大日本雄弁会講談社	24に同じ	雑誌記事
31	1954.11.01	「おおきなかぶ」		こさかしげる/画	『チャイルドブック』18巻11号	国民図書刊行会	ウシンスキー型(登場者変更)	雑誌記事
32	1954.11.28	「人形劇 大きな大根」	齋田喬	舞台の絵あり	『齋田喬児童劇選集 4学年用』	牧書店	23にほぼ同じ(完成形)	人形劇
33	1954.12.10	「大きなかぶ」	栗原登/作	装置図・さしえ 市川禎夫	『日本学校劇名作全集 小学校一・二年用』	国土社	21にほぼ同じ	児童劇
34	1955-56年度	「大きなかぶら」	記載なし	日本風俗、孫は男の子の絵	『しょうごうこくご 1ねん中 新版』(小国1-157)	学校図書	ウシンスキー型(登場者変更)	教科書
35	1955.10.20	「大きな大根」	齋田喬/原作、西原康/脚色	豊田教/舞台図	『学校音楽劇 中学年』	誠文堂新光社	齋田喬の人形劇を「舞踊劇」として構成。篠原正雄/作曲、賀来琢磨/振付	児童劇
36	1955.10.31	「おおきな かぶら」	佐藤辰雄/著	なし	佐藤辰雄『文字とことばの教室 一年生』	三十書房	ウシンスキー型(登場者変更)	副読本
37	1955.12.15	「舞踊劇 大きな大根」	丸岡嶺		『小二教育技術増刊 学校劇と舞踊』1956年版	小学館	35をレコードにあわせる舞踊劇に振付	児童劇
38	1956.01.01	「(昔話)おおきなかぶ」	高山明/文	鈴木寿雄/繪	『幼稚園ブック』正月号 8巻1号	秀文社	ウシンスキー型(登場者変更)	雑誌記事
39	1956.12.01	「(げきあそび)おおきなだいこん」	豊田いと/脚色	鈴木寿雄/繪	『キンダーブック』11集9編 12月号	フレーベル館	ウシンスキー型を脚色	雑誌記事
40	1957年度	「大きなかぶら」	福井研介/訳		『しょうごうこくご 1ねん中』(小国A-104)	学校図書	34に同じ	教科書
42	1958-60年度	「大きなかぶら」	記載なし		『しょうごうこくご 1年中』(小国1-125)	学校図書	34に同じ	教科書
43	1958.02.05	「おおきなかぶ」(げきになるおはなし)	小池タミ子	山田マモル/挿絵	菊田要『子ども会劇集 初級』	さ・えら書房	ウシンスキー型(劇あそびの基になる話)	児童劇
44	1958.12.25	「おおきなかぶだいこん」	上田京子/著者代表	鈴木悦郎/装丁	『1年のさんすう教室(算数編)』小学1年生学習絵文庫②	小学館	ウシンスキー型とグリムが合体。算数の問題付き	読み物
45	1959-60年度	「大きなかぶら」			『わたしたちのこくご 1ねん中』(小国A-153)	学校図書	34に同じ	教科書
46	1959.11.03	「指人形劇 大きな大根」	齋田喬		新人形劇研究会編『人形劇12カ月』	家政教育社	32にほぼ同じ	人形劇
47	1959.09.01	「べーぶさーと おおきなだいこん」	篠崎徳太郎/	柿本幸造/装画	日本学校劇協会編『一年生の学校劇』	小学館	独自の脚色	人形劇
49	1960.09.01	「おおきなかぶ」	土家由岐雄/文	センバ・太郎/繪	『よいこのどうよう』『幼児えほん』巻5号	小学館	ウシンスキー型(登場者変更)	合冊絵本
50	1961-1964年度	「大きなかぶ」	記載なし	服装は洋風	『こくご 1ねん-2』(国語1015)	大日本図書	ウシンスキー型(登場者変更)	教科書
51	1961.11.30	「だいこんかついでわっしよい わっしよい」	齋田喬	(齋田の挿絵あり)	齋田喬『幼年劇全集 2・2学期編』	誠文堂新光社	ウシンスキー型、独自の脚色	児童劇
52	1962.00.00	「おおきなかぶ」	記載なし	サイン:TAKI	小学館の育児絵本『せいのおはなし』	小学館	ウシンスキー型(登場者変更)	合冊絵本
53	1962.05.01	『おおきなかぶ』	ロシア民話、A.トルストイ/再話、内田莉紗子/訳	佐藤忠良/画	『こどものとも』74号	福音館書店	A.トルストイ再話	絵本

おじいさんがかぶを播いた。かぶを引き抜きに行くが抜けないので、おばあさんを呼んだ。やはり抜けないので、孫娘、雌犬がやってきて後に連なって引っ張った。その後足がやってきた。次々に5番めまで足が増えて、「引っ張って、引っ張って」引き抜いた。

足が登場するこのバージョンを「アフナーシェフ型」とする。アフナーシェフは足の意味が分からなかったのか、原文に「足(?)が来た Пришла нога(?)」とクエスションマークがついている。足が登場することに関しては、1868年発行のP.ベッソーノフ П. А. Бессонов (1828-1898) 作『子どもの歌』«Детские песни» 収録のわらべうた「かぶ」Репкаの注記に、一人目がかぶ役になって座り、その足を二人目、三人目と五人目までが次々に引っ張るという遊び方が紹介されていることを根拠に、アフナーシェフ型の原型にはわらべうた遊びが存在するためであろうと推測されている²⁾。

②1864年 K.ウシンスキー「かぶ」Репка (『母語 第1学年』掲載)

教師の教師と呼ばれているコンスタンチン・ウシンスキー Константин Дмитриевич Ушинский (1824-71) が国語の読本として作成した『母語』«Родное слово» 第1学年用に「かぶ」が収録されている。目次には「かぶ(昔話)」Репка(Народная сказка)と記載されている。『母語』には挿絵が入っているが、この話には挿絵はない。現在流布している「おおきなかぶ」とほぼ同型で、おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが登場する。このバージョンを「ウシンスキー型」とする。

おじいさんがかぶを植えると、おおきな、巨大なかぶができた。おじいさんが引っ張るが抜けない。おばあさん、孫娘、ジューチカ(犬の名前)、マーシカ(猫の名前)、ねずみがそれぞれ呼ばれて、次々に後に連なって「引っ張って、引っ張って」引き抜いた。

③1881年 E.ビョームのシルエット画『かぶの昔話』(全8場面) / 1887年1枚絵『おじいさんとかぶのはなし』

女流画家でシルエット画や子どもの絵が得意だったエリザベータ・ビョーム Елизавета Мерку-

рьевна Бём

(1843-1914)のシルエット画による「おおきなかぶ」である。

1881年に8枚のモノクローム画からなる『かぶの昔話』«Народная сказка о репке» がサンクト・ペテルブルクのA.イリイン工房から発行された(完本は未見)。その後1887年に、モスクワのスイチン出版



(図1) E.ビョーム絵『おじいさんとかぶの話』スイチン出版、1887

から多色刷リトグラフ『おじいさんとかぶのはなし』«Сказка о дедке и репке» が「エリザベータ・ビョームのシルエット昔話」сказка силуэта Елизаветы Бём として1枚ものに構成されて発行された。(図1) ビョームのリトグラフは、イギリスをはじめとする西欧諸国でも発売されて人気を博した。スイチン出版のリトグラフには、8場面の絵の下にウシンスキーの「かぶ」と同じ文章が記されている。登場者は、おじいさん、おばあさん、孫娘、ジューチカ、マーシカ、ネズミである。最後に別枠に、力を合わせる事が大事だという教訓的な文章が付いている。内容はウシンスキー型である。

④1940年 A.トルストイ「かぶ」Репка

作家アレクセイ・トルストイ Алексей Николаевич Толстой(1883-1945)が、過去の資料を参考にして再話した。ウシンスキーの「かぶ」を元に文章の形式を整えたもので、ソビエト時代の「おおきなかぶ」の定番になった。福音館書店発行、内田莉莎子再話『おおきなかぶ』(1962)の原典でもある。1940年発行のため、戦前の「おおきなかぶ」の原典には該当しない。

おじいさんがかぶを植えた。かぶよ 育て、かぶよ 甘くなれ。おおきな甘いかぶが育った。抜こうとしたが抜けない。おばあさん、孫娘、ジューチカ(犬の名前)、ねこ、ねずみがそれぞれ呼ばれてやってきて、後に連なって「引っ張って、引っ張って」引き抜いた。

3. 大正期の受容

これまでに判明しているところでは、「おおきなかぶ」は大正期の半ば頃に幼年雑誌や児童誌に掲載された。大正末期の1924年になって、アフナーシェフ『ロシア昔話集』のほぼ全訳が中村白葉訳で一般向けに出版されると、所収の「蕪菁(かぶら)」が翌年には小学生に文章と綴り方を指導する目的で発行された『鑑賞文選』に転載され、少し改変されて「お話」の例ともなった。また、1925年には「欧米小學讀本」シリーズのロシア編に、ロシアの教科書掲載のウシンスキー型の「かぶら」が挿絵入りで翻訳された。

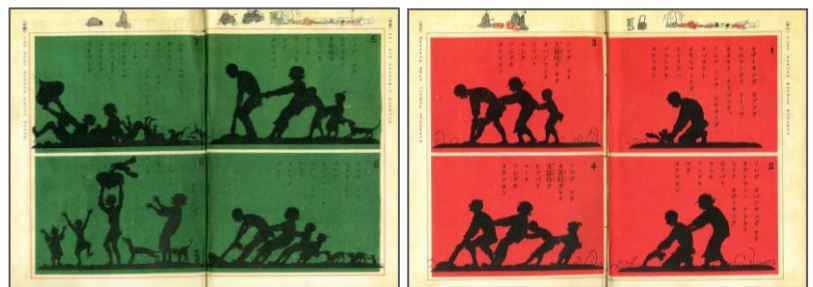
1) 「[オヂイサンガ カブラヲ ウエマシタラ…]」(『幼年の友』10巻2号 新年増刊号、実業之日本社、1918.1.2) 【表1】

幼児向けの絵雑誌『幼年の友』に掲載された4頁8コマのシルエット画と文章による絵話である。タイトルや作者名はない。一見してビョームの絵によく似ているが、日本化された内容に変わっている。登場者：おじいさん、おばあさん、太郎坊、お花坊、ポチ、猫。(ねずみは絵に登場しているが、文章には出てこない)

文章：カタカナ漢字交じり。口調が良い。新しい登場者は前の人を引っ張るとされ、最初から全部を繰り返すことはない。

引っ張る描写：「ヒツパリマシタ／ソレデモ ヌケマセン」

絵：野良着、わらじばき、着物姿と、服装は日本化されている。ビョームの絵の最後は、おじいさんがかぶを持ち、全員が静かに喜ぶのに対して、「[オヂイサンガ…]」



(図2) 『幼年の友』10巻2号 [pp.28-31]

では、万歳をしている。かぶはビョームの絵より大きい。

結末：抜けると尻餅をつき、万歳を唱えた。

考察：登場者名と衣装が日本化されている。孫娘を「太郎坊とオ花坊」とふたりにしたのは、『幼年の友』の男女の読者を配慮したためと推測される。最後の万歳も日本化である。

2) 富士辰馬³譯「蕪（かぶら）」（『少年』231号、時事新報社、1922.10.8）【表2】

ロシア革命後のソビエトについて解説した記事「露西亜は今どうなつてゐるか」（時事新報社記者 下田将美）の中に掲載された1頁の読み物である。目次では「童謡」となっている。内容はウシンスキー型で、挿絵が入っている。



(図3) 『少年』231号 p.35

登場者：お祖父さん、お祖母さん、孫娘、ジョン、お猿、鼠

文章：口調が良く、登場者ごとの繰り返しも忠実に訳されている。

引っ張る描写：「お祖父さんは蕪につかまつた。ひつ張つてもひつ張つてもこげないので…」

絵：農民の衣装、わらじ履きやはだしの様子、表情などにはユーモラスな味がある。

結末：「ひつ張つたらひつ張つたら、ノポクリとこげちやつた。」

考察：文章は猫をお猿に変えた以外はウシンスキーの「かぶ」とほぼ同じである。ウシンスキーは犬をジューチカ、猫をミーシカと名前にしているため、挿絵から猫を猿と判断したとも推測される。

挿絵のロシア風俗や背景などから、外国で出版された原典があると推測される。挿絵も手がかりとして原典の調査中であるが、判明していない。犬の名前のジョンは、明治からよくある犬の名前であったので⁴、単純に英語から入ったとは判断できないと考える。

革命後のロシアの国内状況を解説する記事とともに掲載されており、ロシアの話として「蕪」が選ばれたと考える（昔話との記載はない）。明治期から「ゆきむすめ」などの魔法昔話は『少年世界』や巖谷小波の「世界お伽噺」シリーズで紹介されていたが⁵、単純な「おおきなかぶ」が読み物として掲載されたのは、これが最初であると推定する。

3) 中村白葉⁶訳「蕪菁（かぶら）」（『世界童話大系 第五巻 露西亞篇 アファナーシエフ童話集』世界童話大系刊行會、1924.10.30）【表3】

1924年にアファナーシエフの『ロシア昔話集』（初版1855）が『世界童話大系』の五・六巻として出版されたが、第五巻（中村白葉訳）に「蕪菁」が所収されている。

登場者：おぢいさん、おばあさん、孫娘、小犬、「足（?）」、あとから足が5本までやってくる。

文章：原文の繰り返しや、「!」「?」も忠実に訳されている。

引っ張る描写：「…おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りました。が、抜けません!」

絵：なし

結末：「やつとのことで抜けました。」

考察：動詞で表現されている「тянут-потянут」（チャーヌト-パチャーヌト 引っ張って、引っ張った）を「エンヤエンヤとひっぱりました」としたのは、日本語らしく訳す工夫である。その後「おおきなかぶ」を受容する際に、この擬態語が継承されて何度も用いられた。足が登場するのは、ウシンスキー型とは異なるアファナーシエフ型である。

4) 吉田薫⁷訳「かぶら」(『ロシア小學讀本 第一學年』世界文庫刊行会、1925.4.20) 【表 4】

「欧米小学読本」シリーズ(イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、ロシア)の1冊で、それぞれ8学年までであるうちのロシア篇の小学1年生用に掲載されている。ウシンスキー型で、ひらがな表記である。



(図4) 『ロシア小學讀本 第一學年』 p.24

登場者: おぢいさん、おばあさん、まご、いぬ、ねこ、ねずみ

文章: 直訳調で堅い。

引っ張る描写: 「…おぢいさんが、かぶらを、つかまへた。／ひっぱっても、ひっぱっても、／ひっぱりきれない。」

挿絵: 6頁分の上部に7場面の絵が掲載されている(冒頭は1頁に2図)。ロシアの農民の衣装をつけた登場者たちが、スッキリしたモダンな線画で描かれている。

結末: 「ひっぱって、ひっぱって、ひっぱりだした。」絵の最終場面は、かぶが抜けた後、全員尻餅をついて笑っている。(図4参照)

考察: ロシアの国語教科書を翻訳したもので、挿絵も原典のものと同様と推測する。文章は、ウシンスキー型であるが、2箇所異同がある。(①「植えた」を「播いた」に変更。②「大きく、巨大に育った」の箇所が、「お! かぶらのたねよ。ちょうぶに、うまれよ。しっかり、かたく、かぶらがふとった」となっている。)原典については調査中である。

なお、「かぶら」は2年後(昭和2年)に発行された『選集世界小學讀本 第一學年 上』(世界文庫刊行会、1927.4.20)【表8】に「カブラーロシア」として、再録された。「選集世界小學讀本」は、各国別に出ていた「小学読本」シリーズを学年ごとに作品を選択編集して出版したもので、「かぶら」はカタカナ表記になった以外は文章も挿絵も以前のままである。

5) 「蕪(かぶ)ぬき」(『金の星』7巻6号、金の星社、1925.6.1) 【表5】

8場面からなるシルエット画で、別の話(荒井正巳「小雷」)の上部に7頁にわたって描かれている。ビョームの絵に酷似した絵で、文章はない。

登場者: おじいさん、おばあさん、女の子、犬、猫、ネズミ(絵から判断)

挿絵: 頁の上部3分の1の範囲に1~8の絵が続いている(冒頭は1頁に2図)。西洋風の衣装はビョームと同じであるが、ビョームでは無帽のおじいさんに帽子をかぶせ、丸まっていた犬の尻尾を長く描いている。



(図5) 『金の星』7巻6号 p.111

結末: かぶが抜けると尻餅をつく(図5)。おじいさんがかぶを両手に持ち、みんなは喜んでいる(図6)。(図6)はビョームの最終場面と同じ構図である。



(図6) 同上 p.112

考察: 挿画の画家名は記されていないが、目次欄外に記された画家名の中に、岡本帰一が記載されているため、シルエット画の得意な帰一が描いたと推測される。ビョームの装飾的な足下の部分を省略して物語性を強め、絵の横幅を一定に調整するための工夫がなされている。ロシア昔話とは記されていないが、読者は

外国種の話であると理解したと考える。

6) 「蕪菁」 (『鑑賞文選 尋常四年生』8月号、文園社、1925.8.1) 【表6】

3)中村白葉訳『アフナーシェフ童話集』「蕪菁」の転載である。作者や出典などの記載はない。挿絵は入っていない。

文章：白葉訳「蕪菁」の「！」を全て除き、「、」を4箇所削り、改行を2箇所変更、1箇所漢字をひらがなにしている。

登場者：おぢいさん、おばあさん、孫娘、小犬、足が5本まで来る。

引っ張る描写：「エンヤ〜と引張りました。が、抜けません。」

結末：「やつとの事で抜けました。」

考察：『鑑賞文選』は、「国語学習上最も必要なのは、よき文を鑑賞する機会を多くし、理解力を深め、発表欲を盛んに刺激すること」(「本誌発行の趣旨」1925年9月号)を目的に編集されていた。白葉訳の「蕪菁」は、良い文章の例として掲載されたものと推測する。

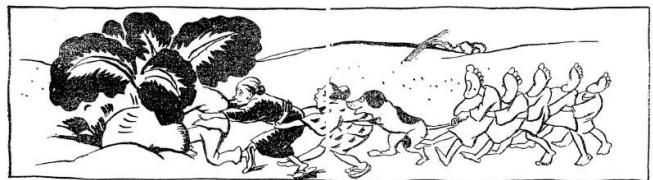
4. 昭和期前期の受容

第二次世界大戦前の「おおきなかぶ」の受容は、大正末に翻訳された『アフナーシェフ童話集』の「蕪菁」と『ロシア小學讀本 第一學年』の「かぶら」を基に、再話されたものが主となっている。また、この時期に児童劇の題材として脚色されるようになった。

7) 「蕪菁(かぶら)」 (『カンショウブンセン 尋常二年生』1月号、文園社、1927.1.1) 【表7】

6)とほぼ同じ内容に挿絵1図が入っている。

文章：6)で除かれていた「！」を白葉訳のとおりに戻した。2番目の足がやってきた段落は削除されている。



挿絵：おじいさんは野良着、おばあさんと孫娘

(図7)『カンショウブンセン 尋常二年生』1927.1 pp.16-17

は着物姿で描かれて日本化されている。足の顔をもち、子どものように短い着物を着た5人の「足」の姿には、江戸の赤本や明治期までの絵に見られる擬人化の伝統がうかがえる。

考察：挿絵は『鑑賞文選』の挿絵を担当していた立野道正が描いたと推定される。『鑑賞文選』は、6)の1925年度は『尋常四年生』が最も下の年齢向けであったが、翌年から『尋常一年生』から『高等科二年生』までの8種類となったため、「蕪菁」は低年齢向けとして『尋常二年生』に掲載されたと考える。ロシア昔話との記載がなく、挿絵により日本化が行われた。

8) 村上寛⁸「お爺さんと蕪菁」 (『新しいお話の仕方と其实例』平凡社、1927.5.30、1927.11.20再版) 【表9】

村上寛がお話論を展開している本に、「實話例」のひとつとして掲載されている。挿絵はない。

登場者：おぢいさん、おばあさん、孫娘、小犬(全部で5匹)

文章：アフナーシェフの「蕪菁」をほぼ踏襲しているが、「足」の代わりに、「小犬」が5匹まで順に登場するように改変している。他は、「エンヤ〜」とかけ声をかけるなど、白葉訳のままである。小犬が来る度に「また」「またまた」を増やすという工夫がされている。

引っ張る描写：「エンヤ〜と引張りましたが、抜けませんでした。」

結末：「やつとのことで抜けました。」

考察：子どもに「お話」をする実例として紹介されたものである。文末の「参考」に「「エンヤ〜と引っ張る」と云ふ語の反覆が興を呼ぶ。（中略）露西亜童話をとつて「お話」を語りやすいやうに改作した。」とある。「エンヤ〜」というかけ声は3)白葉訳『アフナーシエフ童話集』の「蕪菁」と同じであり、すぐ前に掲載されている「屋根裏の蠅の部屋」（村上は「屋根裏の大騒ぎ」と改題）も同書に掲載されているため、原文は白葉訳であると判断される。村上は、お話の実験経験から子どもは反覆と「堆積形式」を喜ぶとし、アフナーシエフが省略した3番目の足以下もていねいに反覆している。足の代わりに小犬としたのは、子どもに受け入れやすくしたものとする。なお、「お爺さんと蕪菁」は1934年出版の『家庭低学年童話範例』（文化書房）【表11】にも再録されている。話の内容は、平凡社版とほぼ同じである。

9) 「かぶらのたね」（『カンショウブンセン 尋常二年』7月号、文園社、1927.7.1）【表10】

同じ『鑑賞文選』に掲載された6)、7)の「蕪菁」とは異なる内容である。アフナーシエフ型からウシンスキー型に変更された。挿絵が4図入っており、7)と同じ立野道正が描いたと推定される。

登場者：おぢいさん、おばあさん、まご（絵では女の子）、犬、ねこ、ねずみ

文章：「おじいさんが まいた かぶらの たね／めがでて はがでて ずんずん ふとる」で始まり、テンポと口調が良い。

引っ張る描写：「えんや えんやと ひっぱった／ひいても ひいても／**ぬけぬ。**には、「なかなか」「まだまだ」「とつても」「それでも」「ひいても」が入るというふうに、フレーズごとに「ぬけぬ」に付く副詞を変更する工夫がされている。

挿絵：4頁分の上部に4場面の絵が挿入されている。着物姿のおぢ

いさんたちとかぶが丸いフォルムで描かれていてユーモラスな味があり、文章と呼応している。

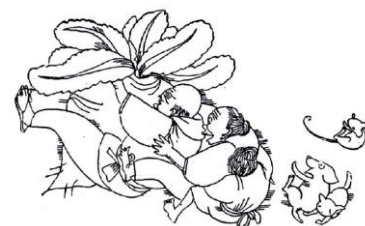
結末：「えんやら やつこら やつとこぬけた／ぬけたら どつしり／しりもち ついた／みんなが みんなが／しりもち ついた」で終わる。「尻餅」は、これ以前の受容では絵に描かれていたが、文章になったのはこの作品が最初である。絵の最終場面も、皆が転ぶ様子が描かれている。（図9）

考察：同じ1927年の尋常2年生向けでも、1月発行の7)「蕪菁」とは年度が違うので、読者は異なっている。『鑑賞文選』掲載の前2作品は、3)中村白葉訳の「蕪菁」を、タイトルを含めてほぼそのまま掲載していたが、この「かぶらのたね」は猫やネズミが登場するウシンスキー型に変更されたうえに、文章も口調よく工夫されている。「えんや えんやと ひっぱった」のフレーズは白葉を踏襲しているが、登場者は4)吉田薫訳「かぶら」（【表4】【表8】）を参考にしたのではないかと推測する。変更には、編集責任者の変更も関係していると推定される⁹。

これ以後は、猫とネズミが登場するウシンスキー型が主流となる。「かぶらのたね」は、累積していく楽しい話として受容されており、日本化されてユーモラスに描かれている絵も含めて、読む物語としては戦前の「おおきなかぶ」のひとつの完成形であるとする¹⁰。



(図8) 「かぶらのたね」 p.18



(図9) 「かぶらのたね」最終場面 p.21

10) 關猛¹¹「大きなかぶ 一幕」(斎田喬著『学校劇選集(低学年用)』北海出版社、1934.12.25)

【表 12】

児童が演じる劇の脚本で、舞台上で子ども役の演者が本を読みあげ、その内容を出演者が無言劇で演じるという形式になっている。児童劇として出版された最初の作品であり、また「おおきなかぶ」というタイトルになった初めての作品でもある。

登場者：「本を読んでいる子供、百姓のおぢいさん、百姓のおばあさん、まご、犬、にはとり、ひよこ、うさぎ、あひる、ねずみ、雀、鳥」。雀と鳥は前座で登場する。

ストーリー：子供が読む本は、おじいさんが播いたかぶの種を雀や鳥が食べるので、案山子を立てるところから始まる。まごから後の登場者は、子供が「お友だちを呼びました」と読むと、犬、にわとりとひよこ、うさぎ、鼠が出てくる。本を読んでいる子どもは途中で眠るが、お話は進行する。

引っ張る描写：「ひつぱつても、ひつぱつても、ひつぱりきれません」(子供が読み上げる言葉)

挿絵：舞台の絵。机と椅子などが右手に置いてある勉強部屋という設定である。

結末：子どもが眠ってしまった後でかぶが引き抜かれ、みんなで踊って、鼠がかぶを担いで去る。子どもは目覚めて、本を閉じ、スタンドの灯を消して去る。

考察：「指導上の注意」に、「外国の讀本中よりヒントを得て作ったもの・・・」と書かれているうえ、「かぶをつかまへました」、「ひつぱつても ひつぱつても ひつぱりきれません」という言葉から、4) 吉田薫『露西亞小學讀本 第一學年』(【表 4】または【表 8】)の「かぶら」をもとに脚色したと推定される。犬の後、動物の登場者が増えたのは、この作品が最初である。

本書の斎田喬の前書きによると、所収の脚本は旧成城小学校系の教師と学校劇研究会会員の手によるもので、上演された経験のあるものという。この劇も、実演を重ねたものと推測される。

また、斎田喬著『児童劇選集 低学年用』(啓文社、1938.11.13 【表 16】)にも再録されている。

11) 高山貞章作・演出「かぶぬき」(影絵人形劇)【表 13】

1935.10.19-20に、人形劇団プークの前身のひとつであった「お人形座」が「かぶぬき」をファイバーによる影絵人形劇によって明治製菓ビル講堂で公演したとの記録が残っている。詳細は不明であるが、ロシア童話によるものとの情報がある¹²。「かぶぬき」は関西でも上演されたが、同年高山が劇団を去り、その後は上演されていない。(川尻泰治編著『現代人形劇創造の半世紀：人形劇団プーク 55年の歩み』未来社、1984.9、pp.30-36、p.370)

12) 栗原登¹³脚色「大きなかぶ」(日本児童劇協会編『日本児童劇集 第一集』厚生閣、1935.12.18)

【表 14】

児童劇の脚本としての2作目である。最後の歌「わっしょい わっしょい」の楽譜も収録されている(佃義之作曲)。挿絵は入っていない。

登場者：おぢいさん、おばあさん、孫、犬、猫、をんどり、めんどり、やぎ、うさぎ一・二、ねずみ一・二・三…

ストーリー：おじいさんがかぶを市場へ持って行くために抜きに来て、大きなかぶを見つける。抜けないので、おじいさんはおばあさんを、おばあさんは孫を、と次々に呼んでくる。最後にやぎが家中のねずみを呼んできて、左右に分かれて押したり引いたりして抜く。

引っ張る描写：おぢいさん「いゝかな。」／一同「いいよ、一二の三。」

結末：抜けたかぶを孫と動物たちが担いで「わっしょい わっしょい／かぶらの みこしだ／わっしょ

い…」と言いながら舞台を去る。

考察: 多くの動物たちが鳴き声をたてながら登場し、次の出演者を呼びに行く度に、登場者一同で「たいへんなさわぎだ」と観客に向かって語るなど、にぎやかな狂言風の脚本である。猫がネズミを追いかけたり、かぶの下敷きになったおじいさんが助け出されたりするエピソードや、「かぶらの御輿」などの見せ場が作られている。また、大きなかぶができた理由を、おばあさんが「お前さんが正直で端正だから」述べるなど、教育的な味付けもされている。歌も入って、学校劇の一典型となった。戦後にも改訂された脚本が何度も出版されている。(次頁 15) 栗原登【表 21】参照

13) 大塚美鳥¹⁴「無聲劇(朗読劇) かぶら抜き」(赤枝一葉編著『学校劇脚本集 中学年用』盛光社、1936.3.5)【表 15】

「おおきなかぶ」を脚色した学校劇の脚本である。

出演: 朗読者、おじいさん、おばあさん、太郎とその友だち、花ちゃんとその友だち

ストーリー: 畠の隅に植えたかぶが大きく育ったが、おじいさん一人では抜けないので、太郎や花ちゃんたちに援助を頼む。朗読者がストーリーを読み上げ、登場者は無言で演じる。

引っ張る描写: 「うんとこどつこい、どつこいしよ」「これは困った。なかへ抜けない」

挿絵: 舞台上で使う道具であるかぶらの図解が冒頭に掲載されている。

結末: かぶが抜けて、一同尻餅をつく。かぶを抱えてスキップしながら退場する。

考察: 「“かぶら抜き”演出に就いて」で、「ロシアの童話に取材した」とあるが、昔話ではなく、現代の話として脚色されている。動物は登場せずに、太郎や花ちゃんといった男の子と女の子たちが並んでかぶを抜く。

5. 戦後の受容—福音館書店『おおきなかぶ』(1962)発行まで(概観)

戦後は「おおきなかぶ」の出版が増加した。終戦の翌年にはソビエト風の絵本『ミンナノチカラ』が出版されて、革新的な息吹が感じられる。また、1950年代には幼児向けの雑誌に昔話として「おおきなかぶ」のタイトルで何度も登場し、学校で演じる児童劇の脚本も盛んに出版された。「おおきなかぶ」は今日まで1年生の国語の教科書に掲載され続けているが、内田莉沙子訳『おおきなかぶ』(福音館書店、1962)の発行以前にも2社の国語教科書に別の形の「大きなかぶ」が掲載されていた。

14) 春本尋子文、大石哲路¹⁵畫『ミンナノチカラ』(二葉書店、1946.4.20)【表 17】

「おおきなかぶ」のはじめてのフルカラーによる単行絵本である。表紙とも全12頁の薄い針金綴じで作製されている。裏表紙の「お母さま方へ」に「アフナーシェフという人があつめたロシアの国民童話の中の「蕪菁」を日本の子供にわかるやうに書いたものです。(中略) 協力すれば、何事でもやりとげることが出来るものであることを教へようとしてみます。」と記載されている。

登場者: おじいさん、おばあさん、娘、犬

文章: カタカナ表記。会話が多く、物語風の再話である。

引っ張る描写: 「「エンヤ、エンヤ……」(ママ) ト ヒッパアリマシタ。ナカナカ カブハ ヌケマセン。」「ヌケマセン」の前の言葉が「ソレデモ」「マダ」と変化している。



(図 10) 『ミンナノチカラ』表紙

絵：登場人物たちはこざっぱりした色鮮やかなロシアの民族衣装を着ている。明るい色使い、アップを用いるなど、斬新さを感じられる。かぶは、多く生えている中のひとつで、巨大ではなく、白い日本風のかぶとして描かれている。

結末：大きなかぶを見て、みんなニコリして終わる。「イヌモ ウレシサウナ カホヲ シテ キマス。」

考察：アフナーシェフ再話の足以下を省略して再話したもので、おじいさんとおばあさんは二人で種を蒔くというように改変されている。中村白葉訳の「エンヤ エンヤ」のかけ声が伝承されている。絵はおじいさんの衣装などがソビエト風で、ソビエトへの親近感がうかがえる。協力の大切さを教えようとしていると解説するなど、「おおきなかぶ」の教育性も考慮されている。戦後、それまで禁じられていたソビエトへの好意的な絵本が出たが、これもその一例と考える。

15) 栗原登「小學校、低學年用 大きなかぶ 一幕」（岡田陽編『玉川学校劇集 5』玉川大学出版部、1948.10.20）【表 21】

戦前の12)【表 14】に修正を加えた脚本で、大勢の動物が登場するにぎやかなストーリーはほぼ踏襲されている。この本は、1950年4月1日までの1年半の間に7刷まで発行されている。

考察：「演出上の注意」に「これは有名なロシア童話の脚色ですが、かわいらしく面白いこと、取り扱いの容易なこと、登場人物の多いこと等の理由で、今日まで何回となく上演されてきた低學年むきの劇です」とある。この「おおきなかぶ」が学校で度々上演された理由が確認される。

「演出上の注意」に、おじいさん、おばあさんは頭巾をかぶってチャンチャンコを着ると指示されている。ロシア昔話「おおきなかぶ」は、児童劇となることによっていっそう日本化がすすんだ。『日本学校劇名作全集 小学校一・二年用』（国土社、1954.12.10）【表 33】にも再録されている。

16) 福光えみ子文、池上和子挿絵「カブぬき」（民主保育連盟・児童文学者協会共編『子供に読んで聞かせるお話の本 秋の巻』羽田書店、1950.9.15）【表 26】

読んで聞かせるお話であるが、「解説」に、子どもたちと相談して適当な節をつける、歌いながら種まきの動作をする、カブ役の子ども6人と登場者が両方から引き合う、といった指示がされている。

登場者：おじいさん、おばあさん、子ども、犬、ネコとネズミ

文章：詩形式で、一文ごとにかけて声や鳴き声が入った囃し歌が付いている。「カブの葉っぱはおじいさんの背より高くなりました。／ずんずんのびろ／ずんずんのびろ／ホーイ ホイ」

引っ張る描写：「ドッコイ ホイ／エンヤサ ホイ／ワッショイ ホイ／ワンワン ホイ／チュッチュウ ホイ／ニャアニャア ホイ」と登場者が増える度にかけて声が増えていく。

挿絵：日本の農民の衣装を来た登場者たちがかぶを引っ張る様子を描いた挿絵が1図入っている。

結末：引っ張るかけ声で終わり、カブが抜けたかどうかは書かれていない。

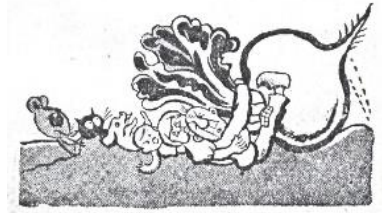
考察：この本は、保育園や家庭でのお話教育をめざしたシリーズで、「カブぬき」は「お話あそび」の章に入っている。歌のような詩形式による再話は、劇遊びやごっこ遊びに発展することを想定したものと考える。幼児が引っ張り合うことで話が終わっており、結末は演じる幼児にまかせるオープンエンディングとなっている。

17) 「おおきなかぶら」（児童文学者協会編『世界文學讀本 小學一年生』河出書房、1950.9.30）【表 27】

文作者の記載はないが、武井武雄が挿絵を描いている。

登場者：おじいさん、おばあさん、まご（絵は男の子）、いぬ、ねこ、ねずみ。

文章：登場者が順番に呼ばれてやってきて、前の登場者をつかまえてひっぱる内容が平明な文章で書かれている。いぬまでは「**は**をひっぱって」が繰り返されるが、ねこからは「ねこがいぬを、いぬがまごを、…」というふうに短縮されている。



(図 11) 『世界文學讀本 小學一年生』 p.16

引っ張る描写：「えんや えんやと ひっぱりました。それでもかぶらはぬけません。」

挿絵：武井のコミカルな絵が 4 図入っている。ネッカチーフやエプロンから、ロシアが連想される。

結末：「やっとの ことで ぬけました。おおきな かぶらが ぬけました。」

考察：末尾に「〈ロシア〉アファナシエフ」と記されているが、登場者が足ではなく、猫とネズミであるため、ウシンスキー型であるが、文章の細部（種を蒔く、犬以下は自分からやって来るなど）はアファナーシエフのものである。また、「えんや えんや」というかけ声から、3)『アファナーシエフ童話集』の白葉訳「蕪菁」【表 3】を参考にしたと推測する。絵はネズミが大きく描かれており、小さなネズミが大きな役割を果たしたという解釈はなされていない。

18) 幼児教育紙芝居研究会編、森やすじ¹⁶画『大きな大きな大かぶら』（幼児教育紙芝居文庫 7、東京画劇社、1954.1.20）【表 28】

紙芝居となった「おおきなかぶ」の最初の作品で、12 場面からなる。「ロシアの民話から」と記載されており、独自の脚色がなされている。

登場者：百姓、おかみさん、男の子、女の子、犬、ネコ、牛、ニワトリ

文章：会話の多い文章で、紙芝居独特の抜く動作も生かされており、観客に呼びかけて、かぶを抜くのを応援してもらう演出もある。



(図 12) 『大きな大きな大かぶら』 表紙

引っ張る描写：「よいこらしよ、どっこいしよ」

絵：登場者はロシアをイメージした服装である。かぶは白く、地上に大部分が出ている。

結末：抜けると「すってんころり！」と転んで動物たちは鳴く。車に積んで持って帰る。

考察：ロシアのお百姓一家が、家畜も含めて家族総出で大きなかぶを押ししたり引いたりして抜き、荷車に積んで持って帰る。登場者を変更し、抜き方も牛にひもを付けて引くなどの脚色がなされている。観客参加型の紙芝居で、次々と登場者が加わる面白さが主眼となっている。

19) 上沢謙二著、斎藤博之絵「大きなかぶ」（『ぐるぐるばなし：世界昔話』世界名作童話全集 45、講談社、1954.3.10）【表 29】

「ぐるぐるばなし」（累積譚）を集めた中に、「ロシア」として収録されている。

登場者：おじいさん、おばあさん、おとうさん、おかあさん、おにいさん、おねえさん、弟、妹、犬のしろ。

文章：おじいさんがかぶの種を蒔き、いっしょうけんめい育てるところから始まる。おじいさんに呼ばれるとおばあさんから妹まで、それぞれ「ああい」「おう」「はいよ」「ようし」「はあい」「へえっ」「あいよ」と、違う返事をしてやってくる。犬のしろは、応援するように吠えるのみである。

引っ張る描写：「そら、ひっぱれ、ううん、ううん」。引っ張る人数分「ううん」を重ねる。

挿絵：おじいさんは煙管を腰に下げた隠居姿、お父さんは背広、おかあさんはハイヒール、お兄さんは角帽など、当時の日本の家族の姿が描かれている。

結末：抜けると頭と頭をうちつけた。おじいさんはおばあさんにこつん、おばあさんはおとうさんに、……弟は妹にこつん。目からなみだをこぼしながら、口ではわらいだした。

考察：ロシアの昔話から採ったと後書きにあるが、現代風に改変されている。抜けると頭をぶつけ合うが、かぶの大きさにうれしくなって泣き笑いするという結末は、家族の仲のよさと、繰り返しの面白さが物語の要であることを示している。同じ内容の話が「大きなだいこん」として、1950年6月発行の『ぐるぐるばなし』（羽田書店）に掲載されている【表24】。

20) 雑誌や絵本掲載の「おおきなかぶ」（1954-1962）

- ・こさかしげる画「おおきなかぶ」（『チャイルドブック』18巻11号、国民図書刊行会、1954.11.1）
【表31】裏表紙に掲載された10コマの絵話である。猫の代わりにニワトリが登場する。絵は藁靴風の靴に脚絆、ルバシカ、ネッカチーフなどロシアを想定している。抜けるとばんざいをする。
- ・高山明文、鈴木寿雄絵「〈昔話〉おおきなかぶ」（『幼稚園ブック』正月号 8巻1号、秀文社、1956.1.1）
【表38】見開き1枚（2頁）の「童話」である。孫の代わりにむすこ、むすめが登場し、動物は犬、猫、ニワトリが来て「よいしょ」と抜く。抜けると転ぶ。絵はネッカチーフや長靴でロシアを意識。
- ・土家由岐雄文、センバ・太郎絵「おおきなかぶ」（『よいこのどうよう』、『幼児えほん』1巻5号、小学館、1960.9.1）【表49】3ページ8コマの絵話。登場者はおじいさん、おばあさん、女の子、男の子、犬、猫、七面鳥となっている。絵は西洋風で「すってんころりん」で終わる。
- ・「おおきなかぶ」[TAKIのサイン]（小学館の育児絵本『せいようのおはなし』小学館、1962）
【表52】見開き1枚（2頁）7コマの絵話。登場者は上記【表49】と同じ。絵は西洋風。

1962年以前の幼年向けの雑誌や絵本に掲載された「おおきなかぶ」は、どれもロシアの昔話とは記されていないが、ネッカチーフや、長靴などのロシア風の挿絵が入っている。この時点でタイトルが「おおきなかぶ」に定着し、制作者はロシアの話と意識していたと推測される。『幼稚園ブック』【表38】掲載の「おかあ様方へ」では、3歳前後の子どもには繰り返しや積み重ねが面白いと解説されている。

21) 教科書掲載「大きなかぶら」（『しょうがっこうこくご 1ねん中 新版』学校図書、教科書番号：小国1-157、1954年検定、1955-56年度使用）【表34】

登場者：おじいさん、おばあさん、こども（図では男の子）、いぬとねこ。ネズミの登場なし。

文章：おじいさんがかぶらの種を蒔き、大きなかぶらができた。抜きに行くが抜けないので、おばあさん、こどもを順に呼ぶ。犬と猫が来る。列を作って引っ張ると抜けた。

引っ張る描写：「えんや えんやと ひっぱりました。」

挿絵：3図の挿絵が入っている。画家名の記載はないが、教師用の手引き書から石田英助の挿絵と判明した。日本の服装をしており、男の子は赤白帽の赤帽をかぶっている。

結末：「大きな かぶらが めけました。」

考察：17)『世界文学讀本 小學一年生』「おおきなかぶら」（〈ロシア〉アフアナシェフ）【表27】と文章が一致している。しかし、ネズミは登場せず、いぬとねこが同時に来るなどの短縮がある。教科書にも『世界文学讀本』にも作者名の記載がないが、57年度版教科書には福井研介訳と記載されている。元の話はロシア昔話だがその記載はなく、挿絵によって日本化されている。



(図13)『しょうがっこうこくご 1ねん中』 pp.66-67

22) 教科書掲載「大きなかぶ」（『こくご 1ねん-2』大日本図書、教科書番号：国語 1015、1960 年検
定、1961-1964 年度使用） 【表 50】

登場者：おじいさん、おばあさん、まご（図では男の子）、いぬ、ね
こ、おんどりとめんどり、ぶた、うさぎ、やぎ、うちじゅうのねずみ。

文章：会話の多い読み物としての文章になっている。

引っ張る描写：一二の三。毎回少しずつ表現が異なる。

挿絵：画家名は記載されておらず、不詳。西洋風の服装で、おばあさ
んはネックチーフにエプロン姿である。



(図 14) 『こくご 1ねん-2』 p.99

結末：「みんなは、かぶをもち上げて、わっしょい わっしょいと かついで きました。」

考察：作者名の記載はないが、児童劇の 15) 栗原登脚本「大きなかぶ 一幕」【表 21】と内容が一致
している。巻末の教科書の単元一覧表に、「大きなかぶ」は二月の単元の「げきあそび」となっ
ており、「指導内容」の欄に「グループで役を決めて読み合う。紙芝居にしたり、上演してみてもよ
い。」と記載されているところから、学校劇脚本である栗原登「大きなかぶ 一幕」が、この指針
に適した作品として物語に書き換えられて掲載されたものと考えられる。

6. 考察

最初の「おおきなかぶ」の受容「[オジイサンガ カブラヲ ウエマシタラ…]」（1918）は、タイ
トルも出典もなしで、ビョームのシルエット画を日本の農民に置き換えて、幼児向けの絵雑誌に紹介さ
れたものであった。絵の魅力と、累積昔話の面白さから掲載されたものと推測されるが、「おおきな
かぶ」は、最初の紹介から日本化されていた。読み物「蕪」（1922）が『少年』に掲載されたのは、ロシ
アの代表的な話としての認識と、口調のよさからと推定する。大正末期に、中村白葉訳「蕪菁」（『ア
ファナーシエフ童話集』1924）と吉田薫訳「かぶら」（『ロシア小學讀本 第一學年』1925）によっ
て、アファナーシエフ型とウシンスキー型の原型が紹介された。この 2 作品から、受容のバリエーションが
生まれたと考える。タイトルが「おおきなかぶ」となったのは、昭和前期の児童劇、關猛「大きなかぶ
一幕」（『学校劇選集（低学年用）』1934.12）からである。児童劇の脚本になることで、「おおきな
かぶ」は日本化がすすみ、登場者が変更され、内容も様々に脚色された。

戦後すぐに発行された、絵本『ミンナノチカラ』（1946）は、「おおきなかぶ」をアファナーシエフ
のロシア昔話としてあらためて紹介したものであった。「おおきなかぶ」は、次第にタイトルが統一さ
れていき、挿絵もロシア風に描かれるようになった。児童劇「おおきなかぶ」は、戦前に引き続き日本
化と脚色がなされて、学校などで演じられ続けた。内田莉莎子訳『おおきなかぶ』（福音館書店、1962）
出版以前に、2 社の小学校 1 年生の国語教科書に、「大きなかぶら」と「大きなかぶ」が掲載されてい
たが、ネズミが登場しなかったり、動物が増えていたり、今日の教科書掲載の「おおきなかぶ」とは
異なっていた。当時は、力を合わせるといった内容解釈より、累積昔話としての面白さが重視され、劇
にするのに適した話であると認識されていたと判断される。

「おおきなかぶ」が大正期から様々な形で受容されてきたのは、物語自体がもつ累積昔話としての楽
しさが土台にあると考える。また、列になることや、かけ声に合わせて一緒に動くこと、口調のよい繰
り返しなど、幼児の喜ぶ遊びの要素が含まれており、登場人物を増やしたり細部を脚色して劇にするの
もたやすい。このような受容は、わらべうたとしても楽しまれたという「おおきなかぶ」の原型に回帰
したとも言える。なお、戦後は「大きな大根」として受容された系譜もあるが、今後の課題としたい。

本稿は、日本児童文学学会第 57 回研究大会（2018.11）にて研究発表した内容に加筆修正を加えたものである。

*（図 11）（図 13）は著作権者の掲載許可を得ています。

<注>

- 1 2015 年度現在で、東京書籍、学校図書、三省堂、教育出版、光村図書出版の 5 社の教科書に掲載されている。（東書文庫蔵書検索による。<http://www.tosho-bunko.jp/> 2018 年 11 月 29 日閲覧）
- 2 Репка. П. А. Бессонов «Детские песни» Москва, Издательство: Тип. Бахметева, 1868, 59-60.
https://xn--90ax2c.xn--plai/catalog/000199_000009_007501318/viewer（2018 年 11 月 4 日閲覧）
伊東一郎「『蕪』の四つのヴァリエント」『なろうど』39 号（ロシアフォークロア談話会、1999.9）pp.10-17.
- 3 富士辰馬の経歴等は不明。
- 4 1910（明治 43）年 7 月 2 日の『朝日新聞』に掲載された犬の名前ランキングの 1 位はポチ、2 位がジョンであった。仁科邦男『犬たちの明治維新 ポチの誕生』（草思社文庫、2017.2）p.306.
- 5 丸尾美保「児童向けに刊行された明治期ロシア昔話：巖谷小波再話を中心に」（『昔話：研究と資料』35 号、日本昔話学会、2007.7）
- 6 中村白葉（1890-1974）：ロシア文学者。東京外国語学校ロシア語科卒業。戦前戦後を通じてチェーホフ全集、トルストイ、ドストエフスキーなど多数の翻訳書を出版した。
- 7 吉田薫（生没年不明）：『模範日露露日会話』（大阪屋号書店、1923.7）出版時の肩書きは、「ペトログラード ポリチエフニクム工學士」となっている。
- 8 村上寛（ -1945）は、大阪朝日新聞学芸部にいた編集者で『コドモアサヒ』の編集も担当した。
- 9 『鑑賞文選』の編集者の特定や、編集方針の変更については、梶村光郎「児童雑誌『鑑賞文選』の研究」（『琉球大学言語文化論叢』2008.3）に詳しく分析されている。「蕪菁」が「かぶらのたね」に変更されたのも、1927 年頃の編集者の交代に関連があると推測される。
- 10 『鑑賞文選』掲載の「おおきなかぶ」の先行研究に、花井信「「おおきなかぶ」の日本への紹介と変容－成立」（『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』39 号、2008.3）がある。「かぶらのたね」がアフナーシェフ版のまま翻訳者の創意工夫したものであれば、日本版として独自性が認められるとして、「日本版原型の誕生」としている。（p.7）
- 11 關猛（生没年不明）：広島で小学校訓導をした後、成城小学校で 1924 年から 33 年まで教え、その後東洋英和に移った。映画を教育に取り入れた実践活動とその理論で知られている。学校劇の指導も行った。（学校劇関係の複数の資料より）
- 12 「“かぶらぬき”演出に就いて」（13）大塚美鳥「無聲劇（朗読劇）かぶら抜き」にお人形座で上演されたことが記載されている。
- 13 栗原登（1900-1994）：1932（昭和 7）年設立の「学校劇研究会」の創立メンバー。千葉県の小学校に勤務。雑誌『学校劇』を配布して全国的に呼びかけて、児童劇の試演や評論活動を行った。
- 14 大塚美鳥に関しては情報が得られなかったが、前書きに「教育の實際家に執筆を頼んだ」とあるため、小学校教師と思われる。
- 15 大石哲路（てつろ）（1908-1990）：戦前から活躍した日本画家・童画家。春本尋子は生没年等不明。
- 16 森やすじ（1925-1992）：アニメーター、絵本作家。東映動画に発足当初から参加し、戦後長年アニメーション制作にたずさわった。